

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第57号

● Contents ●

Topic: Watching Northeast Asia from Mongolia	(Hiroki OKA)	1
Northeast Asian Reports: The Historical Influence of Buddhism on Mongolian Society ...	(Laikhansuren ALTANZAYA)	2-3
Members' Forum: Episodes of our Geological Research in Mongolia	(Akira ISHIWATARI)	4



モンゴルから東北アジアをみる

東北アジア学術交流懇話会 理事長
東北大学 東北アジア研究センター長
岡 洋樹



今年度から東北アジア研究センター長を勤める岡洋樹と申します。東北アジア学術交流懇話会では、会員のみなさまとともに、東北アジアのおもしろさを考えていこうと思っています。よろしくお願いいたします。

私はモンゴルの歴史をテーマとして、そこから東北アジアを考えようとしています。モンゴル人はモンゴル国、中国の内モンゴル自治区などに暮らし、ロシアのブリヤート共和国やカルムイク共和国などにもモンゴル系の民族がいます。このようにモンゴル人は、ロシア、中国、モンゴルに跨がって暮らしています。

モンゴル人は、東北アジアの歴史にとても重要な役割を果たしてきました。現在のモンゴル国や中国のモンゴル人は、17世紀以後、清の支配下に入りました。清を建国したマンジュ（満洲）人は、国を運営する上で、モンゴルの役割をととても重視しました。19世紀末になると、モンゴルは北のロシアや東の日本との関係を深めます。モンゴル国は、1921年以來、ソ連率いる社会主義圏の一員となり（写真1）、内モンゴルは日本と関わります。このように近代のモンゴルは、中国・ロシア・日本の三大国が出会う場になりました。

冷戦終了後、モンゴル国は日本と友好関係を深め、アジアでもっとも親日的な国のひとつになりましたし、日中の経済

関係が深まる中で、内モンゴルとの交流も多くなりました。

モンゴルは、東北アジアを繋ぐかなめの役割を果たしてきたとも言えます。今、モンゴル国の首都ウランバートルを歩いていると、モンゴルで働く中国のビジネスマンや労働者の声が聞こえてきますし、韓国企業の進出も盛んです。中華料理や韓国料理のレストランでは美味を堪能できます。ロシアとの経済関係も重要で、一時遠のいていたロシア人も戻ってきました。モンゴル政府は日本との関係をととても重視し、近年は日本への資源輸出にも熱心です。和服を着たモンゴル人力士の看板が掲げられ、日本料理屋では寿司さえも食べることができます。

その一方で地方に出ると、ゲルと呼ばれる天幕に住む遊牧民が、ゆったりと家畜を放牧する姿を見ることができるのです（写真2）。

30年前、私はモンゴルに留学し、2年間過ごしましたが、当時のウランバートルは、ソ連圏の縮図のようなところでした。そして今、モンゴルは東北アジアの縮図になろうとしています。ウランバートルにいますと、東北アジアを肌で感じることができます。多様な文化が隣り合い、共存しながら、深い結びつきをつくっている、そんな東北アジアを目にすることができるのです。



写真1. 社会主義時代に建てられたアパート



写真2. モンゴル人の馬の搾乳

東北アジア通信

モンゴル社会における 仏教の歴史的影響について

東北大学 東北アジア研究センター客員教授
モンゴル国立教育大学教授

ライハンスレン アルタンザヤ



20世紀より以前のモンゴル社会は、北アジアや内陸アジアにみられる遊牧民の社会の特徴をもっていました。東北アジアの国々の中では、日本にだけ、侍による軍事的な統治制度がありましたが、モンゴルの伝統的社会もこれと似た形をしていました。17世紀から20世紀はじめのモンゴルの歴史は、満洲人に支配された時代といわれます。この時代、モンゴルには盟とか旗（「ホショー」日本の藩にあたる）という軍事的な形をもった行政組織が作られるとともに、その下で、仏教の僧侶が率いる半封建的な制度が存在していたと考えられています。しかしこのような考え方は、モンゴル諸地方の社会の状態を十分に反映したものであるかどうか、さらなる検討が必要です。ここでは、今日のモンゴル国の住民の大半の起源となった、17～20世紀はじめのハルハ部の社会における仏教寺院（写真1）の影響について、簡単にご紹介したいと思います。

モンゴルのハーンや貴族たちは、元朝の時代にチベット仏教を保護していましたが、16～17世紀にこの伝統を復活させ、チベットの高位のラマ（僧侶）たちに、ダライ・ラマ、パンチェン・ホトクトの称号を奉り、様々な保護を与えました。彼らの転生者は、後に北アジア遊牧民の政治制度の特徴の一部を受け継いだ満洲ハーンの支持も獲得し、清朝におけるチベット・モンゴルの仏教会の指導者となったのです。これによって、モンゴルの社会にはラマという新しい階層が現れました（写真2）。モンゴルのハルハ部に1639年に現れたジェブツンダムバ・ホトクト（ホトクトは

活仏を意味する称号）は、ハルハのトシェート・ハーンという貴族の家に生まれました。彼はハルハの貴族たちだけでなく、満洲ハーンの保護も得たことで、ダライ・ラマ、パンチェン・ホトクトに次ぐ高位のラマとなったのです。モンゴルの活仏ラマたちは、古代のインドやチベットのラマたちが転生した化身とされました。17世紀に、こういった高位のラマたちが、シャビ（「沙弥」弟子の意）と呼ばれる属民を持つ制度ができました。シャビナル（シャビの複数形）には二種類の人々がいました。ひとつは「黄色いシャビ」といわれる活仏の寺院のラマたちです。もうひとつは「黒いシャビ」といわれる人々で、ラマではなく、世俗の生活を営む活仏専属の領民でした。17世紀後半になると、ジェブツンダムバ・ホトクトは政治でも大きな影響力をもつようになり、ハルハ地方の貴族たちとともに、ハルハのハーンの一人であるザサクト・ハーンの称号授与に参画するほどでした。ハルハの貴族たちが推戴したラマやその領民は、ハルハ地方全土どこでも自由に暮らす権利を認められました。これもあってシャビの数は増加していき、世俗の貴族が率いる行政単位である旗とならんで、活仏ラマたちがひきいるシャビという新しい社会階層が生み出されたのです。でもモンゴルの貴族たちは、どうして一族の中から活仏を転生させていたのでしょうか。

ジェブツンダムバ・ホトクト以外にも、ハルハ地方にはたくさんの活仏がいましたが、ザヤ・パンディダ・ホトクトもその一人で、その1世は、サイン・ノヤンという貴族



写真1. モンゴルの仏教寺院内部

東北アジア通信

でした。彼はチベットを訪れた際に、チベット仏教の中の黄帽派と紅帽派の宗派對立で黄帽派を助けたことから、黄帽派のダライ・ラマ、パンチェン・ホトクトから「無苦の法王フンドゥレン・ツォーフル」という称号と銀の印を授けられました。サイン・ノヤンの子ダンザン・ラマは、満洲のハーンからハルハの8人のザサグ（日本でいえば藩主にあたる）の一人に任ぜられました。彼の子孫が後にザヤ・パンディダという活仏に認定されたことから、さかのぼってサイン・ノヤンがザヤ・パンディダ1世とされました。彼は貴族出身の活仏だったことから、一般に「ノヤン・ホトクト」（貴族の活仏）とも呼ばれ、チベットのパンチェン・ホトクトから、そのお寺であるタシルンボ寺の中に寺廟と領民、耕地が与えられました。ハルハの貴族たちも、彼に属民の一部を分け与えました。このように、チンギス・ハーンの末裔であるハルハの貴族たちが、自分の家から活仏を転生させたことは、彼らの世襲的な権力基盤を固めることになりましたし、チベット仏教会の有力者の利益とも結びついていました。満洲のハーンも、彼らの権利を認めて保証を与えました。1691年に満洲のハーン康熙帝は、ザヤ・パンディダ・ホトクトの領民に兵役などの義務を免除しました。前述のジェブツンダムバ・ホトクトや、エルデネ・パンディダ・ホトクトなどの他の活仏のシャビにも、同様の特権が与えられました。

1709年以後、ハルハでは貴族たちが会議を開いて、お互いの関係を調整するための法律を定めました。これにはジェブツンダムバ・ホトクトのシャビを管理する役職であるエルデネ・シャンゾドバも参加していました。彼は1723年に満洲のハーンから印璽を授かったとされていますが、1716年の史料を見ても、当時エルデネ・シャンゾドバは、シャビに関わる案件で印璽を押した文書をやりとりしていました。ジェブツンダムバ・ホトクトにシャビを与える文書には、「バルドルジ・ハーンの印」と篆書体チベット文字で書かれたトシュート・ハーンの印璽が用いられていました。つまり、1723年に満洲のハーンがエルデネ・シャンゾドバに印璽を与えたのは、それまでハルハの貴族と仏教寺院が印璽を用いていた習慣を受け継いだものでした。

それでは、ジェブツンダムバ・ホトクト以外の活仏のシャビではどうしていたのでしょうか。

清がモンゴル統治のために編纂した法律書である『理藩院則例』には、「ジェブツンダムバ・ホトクトのシャンゾドバ、青海のチャガーン・ノモンハン、シレート・フレーのザサグ・ラマはみな盗賊を捕縛する（治安を維持するという意）責任をもつ」と定められています。これらの活仏は、ハルハの4人の活仏とともに、「遊牧ラマ部落」といわれています。これらの幾人かの活仏たちの領民は、一般の貴族が率いる行政単位である旗からは区別され、さまざまな義務免除の特権が与えられていたのです。それもあってハルハ地方ではラマの数が増えていき、寺院専属のシャビが出来たのです。ただ、これには例外もありました。ハルハ南部のゴビ地方にいたノヤン・ホトクト（前出のノヤン・ホトクトとは別人）のシャビには、1759年、乾隆帝の命令で、佐領1つ分の義務が課せられました。佐領というのは、一般の旗に置かれていた、兵役などの義務を負担する組織です。また1760年には、他の活仏と同じように印璽が授けられたものの、1794年にはこれが廃止されました。満洲のハーンから印璽を授けられた活仏たちは、「印璽をもつ活仏」と呼ばれ、専属の領民であるシャビをもつことが認められていました。

シャビの増加は、18～19世紀にジェブツンダムバ・ホトクトの寺院フレーを、ハルハの仏教の中心地とし、発展させました。これが現在のウランバートルです。活仏のシャビは、1918年にはハルハの全人口の23%を占めるに至りました。このシャビ領は、1921年の人民革命の後、1925年に一般の旗と統合され、地方行政は刷新されたのです。

以上をまとめますと、17～20世紀はじめにかけて、モンゴルとチベット、満洲の関係の中で、モンゴルにはシャビというチベットともやや異なる独特な社会構造が生まれました。「印璽をもつ活仏」のシャビは、世俗の貴族が率いる旗とともに、当時の社会の変化の一部を構成し、この時代の歴史にさまざまな役割を果たしたことから、詳細な研究が求められるテーマとなっています。（岡 洋樹 訳）



写真2. モンゴルのラマ僧たち

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです(不定期)。

今回は、2011年9月と2012年8月に石渡明教授の研究室でおこなったモンゴル中央部の地質調査についてレポートしていただきました。モンゴルの付加体緑色岩から初めて「鉄ピクライト」や「高マグネシア安山岩」を発見するまでの学術調査の様子が、エキゾチックな調査地風景とともに垣間見られます。石渡教授は、主に日本とその周辺の大陸・海洋地域のオフィオライトやそれに関連する変成岩、深成岩、火山岩について研究しています。

モンゴル地質調査こぼれ話

東北大学 東北アジア研究センター教授・副センター長 (地質学・岩石学) 石渡 明



石渡研究室でモンゴルの付加体緑色岩と海洋底の火山岩の比較研究を行っている博士後期課程の留学生エルデネサイハン・ガンバット君(略称エルガ、本誌53号4ページ参照)の研究指導を兼ねて、2011年9月と2012年8月にモンゴル中央部の地質調査を行った。

調査地域は首都のウランバートルから西南西へ約500kmの距離にあり、調査期間はそれぞれ4日だが、首都と調査地の間の移動に丸1日かかるので、実質の調査は2日である。2回とも調査地の地質に詳しいモンゴル科学アカデミー地質鉱産研究所のデムベレル・オロルマー博士(エルガ君はこの研究員で、博士は彼の上司)が同行した。2011年の調査では研究所の職員が車を運転したが、2012年の調査では博士の夫が運転手を務めて下さった(写真1)。首都からアルヴァイヘルまでは舗装された国道があるが、そこから調査地のハンガイ山地ウヤンガ村までの約50kmは草原を走る。ほとんど樹木のない草原の彼方に山脈がそびえ、「天は蒼々、野は茫々、風吹き草低れて牛羊を見る」と元の斛律金が歌った雄大な景観を満喫できる。初回は9月だったので若干の積雪があり、景色は最高だった。ただし、調査地内に砂金の採掘場があり、数kmにわたって谷を掘り返して、そこだけは自然景観が損なわれていた。国道の途中に1カ所、お金を払えばラクダ(コブが2つの種類)に乗れる観光スポットがあり、数カ所で馬乳酒を売っていた。食事は、移動中は沿道の村の飲食店で羊肉麺などを注文したが、調査地では朝と昼をパン、缶詰、ハムなどで済まし、夜は村のレストランで炒飯や麺類などを食べた。草原にはゲル(円筒形の移動式住居、ロシア人はユルトと呼ぶ)が点在し、羊、山羊、牛、馬、ラクダ、ヤクなどが放牧されていて、家畜の群れが横断するときは国道の交通がストップする。国道沿いの村では豚も見られたが、犬のように自由に歩き回っていた。太陽電池や衛星放送のパラボラアンテナを備えたゲルが多く、車やバイクが横に置いてあって、生活はかなり豊かそうに見えた。ウヤンガを含むいくつかの村でチベット仏教のお寺が再建されている。モンゴル語の表記はロシア文字を使っており、街の設計などはロシア式だが、ロシア正教会はほとんど見られない。

これら2回の調査により、我々はモンゴルの付加体緑色岩からは初めてとなる鉄ピクライト(写真2)や高マグネシア安山岩を発見した。現在は大陸の中央にあるモンゴル地域は、日本と同様にプレートの沈み込み帯で形成された古生代の付加体でできており、今回発見した鉄ピクライトは、これらの緑色岩がマンツルの巨大な上昇流による当時の海底火山活動の産物、即ち海台の断片であることを示し、高マグネシア安山岩は日本の讃岐岩によく類似し、沈み込み帯での特殊な火山活動を示す。エルガ君はこれらの発見を論述した英語の論文を完成し、学術誌に投稿した。日本とモンゴルは「付加体でできている国」という共通点があり、日本の地質学の研究方法がそのまま適用できるので、今後も両国のこの分野の交流が進めば、モンゴルの地質の理解が大きく進展することが期待される。



写真1. ウヤンガ村にて。左から石渡、オロルマー博士、彼女の夫、エルガ君



写真2. 発見した鉄ピクライト。黒い粒は変質したカンラン石。白い網目状の部分は石基



今回はモンゴル特集である。モンゴル史の研究者でもある新任の岡センター長のあいさつのあと、アルタンザヤさんによるモンゴルのチベット仏教についての興味深いお話がある(最近はキリスト教も広まっているらしい)。最後は私のモンゴル地質調査の余談である。モンゴルの文化と自然の一端を知っていただければ幸いである。(石渡 明)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第57号 2013年6月25日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41

PHONE: (022)795-7580

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/

東北大学東北アジア研究センター 1 気付

FAX: (022)795-7580

E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp